

〈特集：豊かなアウトドアライフに向けて〉

アウトドア活動におけるプログラムの現状と課題

奥田直久*

Recent Trends and Problems on Relevant Programmes for Outdoor Activities in Japan

Naohisa OKUDA

I はじめに

「アウトドア活動」が「ブーム」であるといわれて久しい。過去に遡れば、高度経済成長期である昭和40年代ごろからアウトドア指向の傾向が見られるようになったといわれている¹⁾が、それ以前においてもその傾向はあったに違いない。

自然保護行政の世界においても、昭和25年の「自然と親しむ厚生運動」の開始を皮切りに、自然と親しむ「野外活動」の推進が進められてきた²⁾。その後においても、審議会や³⁾小委員会⁴⁾において「自然とのふれあい」などをテーマに、自然公園を中心としたアウトドア活動などによる利用の方向性が示されている。

しかし、本稿のテーマである「アウトドア活動」の概念は、必ずしも統一的な定義づけはなされておらず、具体的な活動の例示をもって様々に整理と分析がなされてきたように思われる^{5)~9)}。また、そうした活動(アクティビティ)を実際に運営・実施する計画(プログラム)についても、十分な事例研究が進んでいるとは言いがたい。

このため、本稿のテーマに沿って検討を進めていくことは些か困難であると言わざるを得ないが、とりあえず次のような前提条件を明確にした上で、「アウトドア活動」における「プログラム」の現況を把握することを試みるとともに、その課題について考察を加えてみることにしたい。

・本稿では、「アウトドア活動」(または「野外活動」)を、その目的如何によらず結果的に「自然とふれあう活動」と位置づける。

・本稿にいう「プログラム」とは、一連の活動の実施

計画(事業)と定義し、単なる活動(アクティビティ)そのものとは区別して考える。

II アウトドア活動におけるプログラムの現状

1) アウトドア活動プログラムの類型

言うまでもなく、「アウトドア活動」には実に様々なものがある。さらに、それを実施する「プログラム」となれば、組み合わせの数も増えるので、実に多様なものが存在することになる。

「アウトドア活動」(アクティビティ)そのものについては、「自然・ふれあい新時代」¹⁾をはじめ、いくつかの文献において、その活動の形態から類型化を行い、分析を加える試みがなされてきている。(表1)

一方、前述のとおり「プログラム」としての把握・分析の試みの事例は、あまり多くない。ただし、概念として「アクティビティ」と「プログラム」が必ずしも区別されて用いられていないので、アクティビティ分析の中にも、プログラムの傾向を把握するのに役立つものもある。

例えば、首都圏の市町村を通じて行った自然ふれあい活動を実施している団体へのアンケート調査結果の分析では、表2のような7種類の区分が行われている。((財)自然環境研究センター、1994)⁸⁾

これは、あくまでもアクティビティの形態による分類であるが、区分を眺めてみると、それぞれがプログラムの性格づけを表しているともいえる。

また、必ずしも「アウトドア活動プログラム」の全体を表すものではないが、「環境教育プログラム」という切り口での分析については、次に紹介するように、いくつかの例がある。

*環境庁自然保護局計画課

(Planning Division, Nature Conservation Bureau, the Environment Agency)

表1 自然の利用形態および施設（環境庁自然保護局計画課,1989）⁴⁾

活動の形態	レクリエーションの種類	主要施設	活動の形態	レクリエーションの種類	主要施設
1. 見る	風景探勝 史跡名所巡り 花見・紅葉狩 祭り・行事見物	車道 展望台 ドライブイン 案内所 広場 休憩所 広場	7. 遊ぶ	磯（水）遊び 観光農園（牧場） 野外ゲーム フィールドアスレチック デイキャンプ 魚釣り 潮干狩り 〇〇狩り ハンティング	観光農園（牧場） 多目的広場 フィールドアスレチック場（コース） 野外バーベキュー場 船着場 釣り場 ハンティングエリア
2. 歩く	登山 ロッククライミング ハイキング・森林浴 バックパッキング ケービング オリエンテーリング ウォークラリー	登山道 山小屋 導標 避難小屋 遊歩道 園地 休憩所 オリエンテーリングコース ウォークラリーコース	8. 運動する	テニス ゴルフ その他フィールドスポーツ インドアスポーツ アーチェリー ゲートボール ガーリング	テニスコート ゴルフ場 多目的グラウンド 体育館 アーチェリー場 ゲートボール場 ガーリング場
3. 登る （陸上）	ドライブ ツーリング サイクリング モトクロス マウンテンバイク サンドバギー 乗馬 ケーブルカー・ロープ ウェー・夏山リフト 遊覧船 川下り ヨット・ボート モーターボート・水上スキー サーフィン・ウィンドサーフィン ジェットスキー・カヌー	車道 パークウェイ ドライブイン 車道 パークウェイ ドライブイン 自転車道 モトクロス場（コース） 乗馬場（コース） ケーブルカー・ロープウェー・ 夏山リフト 船着場 船着場 係留施設 クラブハウス 修理工場 各コース（エリア） パースハウス 各エリア	9. 学ぶ	自然観察（学習） バードウォッチング アニマルウォッチング スターウォッチング グリーンアドベンチャー 植物（昆虫）採集 体験農（林漁）業 サバイバル体験	ネイチャートレイル 野鳥の 森 観察舎 植物園 動物園 水族館 博物館 コース
（水面）			10. 創る・ 鑑賞する	写生 句会 写真 〇〇作り（工芸・工作） ログハウスビルディング 野外演劇（コンサート） イベント（創作・参加型）	作業所 野外劇場 音楽堂
4. 泳ぐ （潜る）	（海）水浴 海中遊覧 シュノーケリング スキューバダイビング	遊泳区域 パースハウス 海の 家 監視所 救護所 プール 船着場 グラスボート 海中 展望塔 海中遊歩道 船着場 パースハウス ダイ ビングスポット	11. 泊る・ 休む	キャンプ オートキャンプ 宿泊 避暑（寒） 温泉浴	テントサイト 炊事棟 園地 オートキャンプ場 ホテル 旅館 民宿 ペンシ ョン 保養所 寮 別荘 パン ガロー コンドミニアム 図 書館 美術館 会議場 ショッ ピングセンター 温泉旅館 クアハウス
5. 滑る	スキー（ゲレンデ） スキー（ツアー） クロスカンリースキー スケート そり スノーモービル グラススキー スーパースライダー	ゲレンデ リフト レストハウス ツアーコース 避難小屋 クロスカンリースキーコース スケート場 そり滑り場 グラススキー場 スーパースライダー			
6. 飛ぶ	遊覧飛行 スカイダイビング ハングライダー パラグライダー 熱気球	飛行場 飛行場 グライダーゾーン			

※自然の中で行われているレクリエーションを最近の各種アウトドア雑誌から網羅的に抽出し分類したもの。
・用具、機材の開発、志向の個性化等を反映し、レクリエーションの種類は多様化、複合化している。
・全体の傾向としてスポーツあるいは参加志向、道具志向、ライセンス志向がうかがわれる。

表2 自然ふれあい活動の具体例（（財）自然環境研究センター，1994）⁸⁾

	区 分	アンケートによる活動内容例
1	観察会型	地層観察、バードウォッチング、自然観察会、春を食べる会、山菜採り（試食会）
2	名所・遊び型	花見、れんげ祭り、はたる狩り、星空を眺める会、摘み草と草花遊び、草花遊び、いかだ祭り、川遊び、野原で遊ぼう、バーベキュー大会、こども会の交流会
3	間接型・製作型	スケッチ大会・写生大会、撮影大会、花壇づくり、野草園づくり、クリスマスリースづくり、俳句・短歌づくり、イラストマップづくり、鳥の巣箱づくり 鮭の放流（稚魚の飼育）
4	散策・ウォーク型	ハイキング、遠足、川の源流探検、散策、ウォークラリー、オリエンテーリング、歩け歩け大会、用水めぐり、体力づくり歩く会、史跡めぐり森林浴、雑木林めぐり
5	野外レクリエーション型	キャンプ、デイキャンプ、アウトドア教室、野外ゲーム カヌー教室、サイクリング、潮干狩り、ウィンドサーフィン、釣り大会、フィールドアスレチック
6	体験農業、体験林業型	野菜づくりと収穫、田植え、稲刈り、花づくり、堆肥づくり、椎茸栽培、きのこ刈り、炭焼き教室、間伐・下草刈り、里山管理

表3 環境教育プログラムの全体像を捉えるための分類
(大島,1992,¹⁰⁾をもとに筆者が作表)

プログラム分類		活動の例
活動形態	①学習活動 ②生活体験活動 ③創作活動 ④スポーツ活動 ⑤感受体験活動	樹木の冬芽観察、田圃の生き物調査 農作業体験、野草茶づくり 落ち葉の絵本作り、森の中での歌づくり スキндаイビング、パラグライダー、カヌー、乗馬 ネイチャーゲーム、ナイトハイク等(五感を利用した体験)
実施環境	①森や草はら ②水辺 ③公園・住宅地など身近な環境 ④室内 ⑤その他の環境や状況	動物の足跡とり、虫の声鑑賞、樹皮の拓本づくり 河原の石を利用したアートづくり、ビーチコーミング、海洋地形の観察 ドングリを育てる、野草園づくり、チョウの羽化観察 紙芝居づくり、夕食のおかず観察 早朝・夜間のプログラム、雨・雪を利用したプログラム
対象年齢	①幼年期(0~6歳) ②少年期(7~12歳) ③青年期(13~18歳) ④大人(19歳~)	落ち葉のプール遊び、動物ジェスチャーゲーム 草木染め、大木でのプランコづくり、樹皮模様の石膏とり 鳥の古巣調べ、川の自然度調べ 開発予定地の現地見学会

表4 アクティビティの領域による分類(川嶋,1996)¹¹⁾

領域区分	アクティビティの例
自然観察	自然観察ハイキング、バードウォッチング、各種ネイチャーゲーム
クラフト	バードコールづくり、鳥の巣箱づくり、バード(フィッシュ)カービング
エンターテイメント	映像上映、スライドプログラム、紙芝居づくり、演劇づくり
芸術	スケッチ、うた作り、俳句作り、アースアートプログラム、絵本作り等
レクリエーション	各種グループワークゲーム、各種アイスブレイク(注・活動のはじめに打解けるための)ゲーム
アウトドア	クライミングウォール、カヌー、XCスキー、スクーパダイビング
身体精神	気功体験、森の中での瞑想、ナイトハイキング
食	豆腐・納豆などの大豆食品づくり、山菜・きのこ教室、保存食品づくり
農林漁業	家畜の世話、林業体験(間伐、下草刈り、植林)、野菜・果樹栽培
古い生活体験	炭焼、薬細工

例えば、大島(1992)¹⁰⁾は、環境教育プログラム(：もしくはそれを構成するアクティビティ)を「活動形態」「実施環境」「対象年齢」から分類を行い、全体像の把握を試みており(表3)、川嶋(1996)¹¹⁾は、「自然学校で実施される」ことを前提として、プログラムを構成するアクティビティ分類として、10の領域分類を試みている(表4)。

これらのアクティビティは、必ずしも「野外」で実施する必要性のないものもあるので、「アウトドア活動」としての類型には適当でないものも含まれているが、現在行われているプログラムの全体像を推察するには、十分利用できるものと思われる。

なお、川嶋は、この分析に続きプログラムの例示を行っている¹¹⁾が、その前提として、プログラムを考える上で最も重要なこととして、何を狙いとして当該プログラムを実施するのかというコンセプトを明確にす

るべきことを強調している。

以上のような試みは、プログラムが多岐多様に渡るものであることを明らかにしており、逆にいえば具体的な事例の網羅的な把握と、その全体的な分析は極めて困難なことであることを物語っている。

このため、プログラム自体の態様からみた類型化を行うよりは、むしろ川嶋の指摘するように、その「ねらい」に焦点を当てて分析していく方が、現在のプログラムの現状は把握しやすいものと思われる。

このような分析例として、「自然体験活動推進方策検討調査」((財)国立公園協会、1991)¹²⁾がある。この調査では、全国の15の団体で実施している27の「自然体験活動」(注・「環境教育的視点をもって自然環境の中で実施している」という限定がつけられている)の事例をもとに、以下の3つ(「その他」を入れて4つ)に分類して概念整理を試みている。

- ①自然そのものを体験するプログラム
- ②人間生活（活動）との関わりを探るプログラム
- ③自分自身の新しい可能性を探るプログラム
- ④その他（「つくる」活動プログラムなど）

この整理は、必ずしもアウトドア活動全般を網羅できるものとは思えないが、プログラムの「ねらい」として重要なポイントがうまく示されていると言えよう。

また、「環境教育（もしくは自然観察）のプログラム」という切り口ではあるが、吉田（1989）¹³⁾は、その「ねらい」もしくは「効果」から、図1のような段階的なプログラムの整理を行っている。

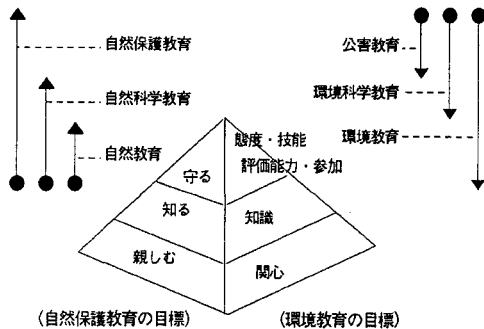


図1 環境教育の目標と自然観察プログラム
(吉田, 1989)¹³⁾

これを「アウトドア活動プログラム」という切り口に広げる場合、冒頭で定義したように「アウトドア活動」自体が必ず「自然とふれあう」ものであるから、最低限「自然と親しむ」プログラムとして位置づけることは可能だと考えられる。

しかし、そのプログラムの「ねらい」として、そのことを意識するかどうかによってそのプログラムのもつ意味も変わってくる。すなわち、重いザックとともに登山道のみを眺め頂上を目指す活動も、「自然と親しむ」ねらいを持たせるだけで、1つの環境教育プログラムに変身し得るのである。

「自然と親しむプログラム」は、図1に示されているように、全体を支える底辺となるべきプログラムである。アウトドア活動プログラム自体にこうした段階の位置づけとその意味があることを理解することは、重要なことであると言えよう。

それでは、次に、こうした類型の考え方を念頭におきつつ、できる限り具体的なデータ分析の事例を見ることにより、現状の把握を試みてみたい。

2) アウトドア活動プログラムの現況

表2に例示した首都圏の事例調査においては、類型化した活動内容ごとの実施団体数の分析結果が出されている。(図2)⁸⁾

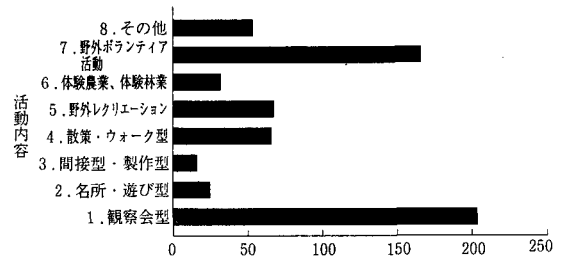


図2 主な自然ふれあい活動の内容
(財)自然環境研究センター)⁸⁾

この結果は、あくまでも特定地域のケーススタディであり、アウトドア活動全体に一般化することはできないが、「観察会型」が圧倒的に主流を占めているという傾向は、注目に値するものと考えられる。

この傾向は、博物館・都市公園・自然公園・民間企業などへ自然観察会のプログラム内容を聞いたアンケート調査（吉田, 1989）¹³⁾においても、12のプログラム類型のうち「観る」プログラムが大半を占めるという結果に現れてきている。(表5)

表5 自然観察プログラムの実施状況
(吉田, 1989,¹³⁾を一部抜粋)

活動内容	頻度	割合%
観る	2528	55.0
体験する	513	11.2
話を聞く	339	7.4
遊ぶ	289	6.3
調査する	253	5.5
芸術する	209	4.6
採集する	158	3.4
保護活動	106	2.3
作る	88	1.9
食べる	88	1.9
探訪する	19	0.4
実験する	6	0.1
計	4596	100.0

また、「環境教育」というキーワードで整理した調査例として、第4回清里環境教育フォーラム・プログラム研究部会の調査がある。¹⁴⁾¹⁵⁾この調査は、フォーラムへの参加者から、自分が実施している、もしくは想定している「環境教育プログラム」について列挙してもらい、いくつかの側面からそれらの分類を試みたものである。必ずしもすべてのプログラムが「アウトドア活動」にかかるとは言えないが、プログラムの

「領域」として、5つの分類で整理を行い、表3のような結果を出している。(降旗, 1991)¹⁵⁾

表5 考え得るプログラム例の分析
(降旗, 1989,¹⁵⁾をもとに筆者が作成)

領域	事例	割合%
自然を学習する	317	50.6
自然を感じる	125	20.0
自然の中で衣食住の体験	72	11.5
自然を素材とした芸術	40	6.3
野外でのスポーツ	14	2.3
※ 分類不可	58	9.3
計	626	100.0

以上のデータは、ほとんどがプログラムの提供側からの情報であること、また、「環境教育」という目的を特化させて調査した結果の分析であることから、これらの傾向を一般的な「アウトドア活動プログラム」の傾向として位置づけることはできない。

ただし、実際の活動としては最も多く行われているであろう「自然と親しむ」段階のプログラムよりも、「観察」や「学習」といった「自然を知る」という第2段階のプログラムの頻度が高い結果が出ていることは、プログラムの提供側の意識の傾向が現れているといえよう。

すなわち、アウトドアスポーツのような「自然と親しむ」「野外レクリエーション型」「遊び型」のアクティビティは、プログラム計画づくりにおいて十分意識されておらず、参加者に何かを「教える」「見せる」といった働きかけの強いアクティビティが計画づくりにおいて主流を占めているものと思われる。

しかし一方では、環境教育・自然教育の世界においても、より多様なプログラム・デザインの必要性が指摘されている。¹⁶⁾例えば、「木の上の家づくり(tree house)」や「イルカと一緒に遊泳(dolphin swim)」、「シーカヤック・ツアー」「樹林内での気功術」など、様々なアクティビティがプログラムとして取り入れられており¹⁶⁾、「感性への働きかけ」や「主体的参加」などのキーワードの下、あらゆる「アウトドア活動」がプログラム化されつつある。

3) プログラム・デザイン

ここまで、「アウトドア活動プログラム」にどのようなものがあり、現在、どのような傾向があるといえるのかについて見てきた。

しかし、1)で述べたように、「プログラム」の本

質は、その態様によって決まるのではなく、その「ねらい」が最も重要であるといえる。

そこで、この項では、「ねらい」を具現化するプロセスであるプログラム・デザイン技術の現状について、見ていくことにしたい。

吉田(1989)¹³⁾は、様々な状況に応じた環境教育のプログラム・デザインが必要であるとして、①参加者の構成、②参加者の年齢、③実施する季節、④実施する環境、⑤観察の対象、⑥観察の流れ、⑦目的の段階、の7項目を考慮すべきことを指摘している。

また、永吉(1993)¹⁷⁾は、環境教育サービスのプログラム・デザインのプロセスについて、図3のような構造を明らかにした上で、重要な事項として以下の項目を挙げている。

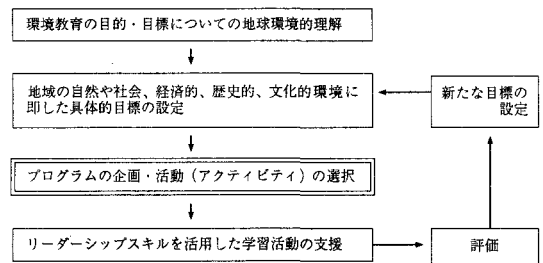


図3 環境教育のプログラミング
(永吉, 1993)¹⁷⁾

- ①目標に応じたプログラムの企画
- ②学習の流れと認識の深まり、学習の楽しさに配慮したプログラムの企画
- ③課題解決と体験を重視したプログラムの企画
- ④日常、週間、月間、年間のプログラムの企画
- ⑤人的資源、支援組織の確保
- ⑥活動(アクティビティ)の選択・創造

吉田の提案の中の「観察」及び永吉の提案の中の「環境教育」「学習」「学習活動」という言葉をすべて「アウトドア活動」に置き換えれば、環境教育に限らない「アウトドア活動プログラム」のデザインにも応用できるものと考えられる。

さらに、高田(1993)¹⁸⁾は、自然解説プログラムの実施(演出)における留意事項として、以下のプロセス(一部筆者が加筆修正)を踏むべきことを提案している。

- ①導入(人々との出会い)
 - ・アイスブレイク(こころほぐし)
 - ・フッキング(つかみ=導入)

・切り口（活動の視点）の提示

②活動（参加者とのキャッチボール）

- ・自然の知識を伝えること
- ・活動のプロセスを学びとすること
- ・参加者の立場を受入れること
- ・参加者から働きかけによりテーマを広げること
- ・広げたテーマを参加者の中で深めていくこと
- ・活動のまとめを行うこと

③活動の振り返り（自分との出会い）

- ・1人での振り返り
- ・みんなでの振り返り（分かち合い）

④段階的なプログラムの立体的構成によるカリキュラムの作成

⑤評価（クリティーク）

この流れについては、川嶋（1996）¹¹³も、「つかみ」→「本体」→「まとめ」という一連の流れを押さえてデザインすることの必要性を指摘しており、特に評価（クリティーク）の重要性について強調している。

これらの考え方については、「アウトドア活動プログラム」全体として考えた場合も、活動の結果の教育的効果をねらった場合には、きわめて有効な手法であることは間違いない。

Ⅲ アウトドア活動におけるプログラムの課題

Ⅱにおいて、アウトドア活動プログラムの現状について見てきたが、次に、これらのプログラムの実施とそれへの参加を推進する上での課題について、簡単に整理しておきたい。

1) プログラム計画（デザイン）上の課題

現在考えられているプログラムのデザイン技術については、Ⅱの3)において紹介したとおりであるが、降旗（1991）¹¹⁴は、環境教育プログラムについての（デザイン段階での）問題点として、次の5点を指摘している。

- ①具体的なプログラム展開手法の研究
- ②（必要なのに）行われていない）ウィークポイントの研究
- ③プログラムの分類方法の再検討
- ④プログラムの目標段階（の定義）の再検討
- ⑤プログラムの評価と効果測定の検討

これらの指摘は、プログラムそのものあり方に及ぶ

重要な問題であり、当該分野において今後研究を進めべきテーマであるともいえよう。

この分析を「アウトドア活動」という、より広い切り口で見直した場合には、さらに課題が追加されるものと思われる。

いずれにせよ、こうした基礎的なプログラム事例の研究と概念整理、そして手法技術の開発が、「アウトドア活動プログラム」のデザイン上の最も重要な課題の1つであるといえよう。

2) プログラム実施上の課題

「自然体験活動推進方策検討調査報告書」（1991）¹¹⁵では、自然体験プログラム実施上の問題として、①財政的（参加費を高く設定せざるを得ない）問題、②指導者の養成・確保の問題、の2点を主要なものとしてとりあげ、さらにこれらに付随する問題として、③集客の工夫の必要性、④活動の場の環境の悪化、⑤プログラム開発の必要性、⑥プログラムに対する周辺関係者の理解不足、⑦施設、人材、プログラムの一体的運営の必要性、等について指摘している。

これらは、プログラムの実施段階における、実施主体（主催者）側からの視点で整理されたものあり、プログラムの実施そのものの障害となり得る具体的なポイントである。

①の「財政的問題」については、アウトドア活動のプログラム自体が、行政ベースのサービスとして実施される場合には、あまり問題とはならないが、採算性を考慮する必要のある民間事業として実施する場合には、大きな障害となるものであろう。

この解決のためには、プログラム開発への援助や施設使用の便宜など、行政が支援施策を講じていくとともに、業界内においても経営研究や協力体制構築を推進していくことが必要と思われる。

また、②の「指導者の養成・確保の問題」については、一部のスポーツ・レクリエーション型活動において既に実施されているような資格認定制度の創設や、研修システムの確立により解決していくことが望まれるものである。

こうした社会基盤の整備にも及ぶ問題については、短期的な解決が必ずしもできるものではなく、中長期的な視点で取り組む必要がある。そして、行政と事業者、国民が協力して検討を行い、必要な措置を講じていくことが重要であろう。

3) プログラムの受け手側の課題

'96年版のレジャー白書¹⁹⁾では、「ヒマもカネも増えず」と称して、労働時間の短縮傾向の停止と平均消費性向の一層の減少、そして余暇時間・余暇支出を減少させた者の割合増加を指摘している。さらに、余暇活動参加率の伸び悩みや、余暇活動のセルフ化、ハイテク化、ネットワーク化の傾向があることを分析している。

これらの傾向は、アウトドア活動プログラムへの参加促進の意味では、プログラムを受け手側のマイナス要因であるといえる。

このため、オートキャンプ人口の激増²⁰⁾にみられるような、国民の「自然とのふれあい」のニーズ拡大とは裏腹に、その手助けとなるはずのプログラムへの参加は減っているのではないかと推測される。

こうしたプログラムの受け手側の障害を乗り越えてゆくためには、社会構造そのものの転換が求められることもあるだろうが、より良質で安価なアウトドア活動プログラムを提供していく、という供給側の一層の努力が必要であろう。

IV おわりに

以上、わが国のアウトドア活動に関して、「プログラム」という側面での現状と課題の整理を試みてきた。

手元入手した資料に限界があったことや、自分の経験から分析を進めてしまったことから、本稿は「アウトドア活動」という切り口ではなく、どちらかというと「環境教育・自然教育活動」という切り口からの整理となってしまうことをお断りしておきたい。

しかし、考察を加えていく中で、Ⅱの2)で若干示したように「アウトドア活動」そのものにとっても「環境教育」という視点は重要なものであり、場合によっては表裏一体の関係をもっているものであると感じた。

その意味で、レジャー・レクリエーションに関わる多くの方々が「環境教育」にも興味をもっていただき、プログラム・デザインに応用していただくことを強く期待している。また一方では、環境保護・環境教育に携わる者の側でも、レジャー・レクリエーションに注目し、その意義をあらためて見直していくことが必要であると考えている。

【参考および引用文献】

- 1) (財) 余暇開発センター (1984) : 今後の余暇空間整備の方向に関する基礎的調査 (国土庁委託調査) 報告書, 101-105
- 2) 安岡正三 (1962) : 今後における自然公園と野外レクリエーションの問題 : 国立公園199,2-5
- 3) 自然環境保全審議会 (1968) : 自然公園制度の基本的方策に関する答申 : 国立公園223,1-11
- 4) 環境庁自然保護局計画課 (1989) : 自然・ふれあい新時代 (自然環境保全審議会利用のあり方検討小委員会報告), 2-42 : 第一法規
- 5) (財) 日本野生生物研究センター (1989) : 昭和63年度民間事業者の活用による自然とのふれあい促進調査 (環境庁請負調査) 報告書, 6-14
- 6) (財) 日本野生生物研究センター (1990) : 平成元年度民間事業者の活用による自然とのふれあい促進調査 (環境庁請負調査) 報告書, 1-53
- 7) (財) 日本野生生物研究センター (1991) : 平成2年度民間事業者の活用による自然とのふれあい促進調査 (環境庁請負調査) 報告書, 2-12
- 8) (財) 自然環境研究センター (1994) : 平成5年度自然環境保全目標検討調査 (環境庁請負調査) 報告書, 93-346
- 9) (財) 国立公園協会 (1988) : 利用志向の多様化に伴う公園計画作成手法検討調査 (環境庁請負調査) 報告書Ⅱ, 83-95
- 10) 清里環境教育フォーラム実行委員会編 (1992) : 日本型環境教育の提案, 34-44 : 小学館
- 11) 日本環境教育フォーラム (1996) : 自然学校宣言, 131-137
- 12) (財) 国立公園協会 (1991) : 自然体験活動推進方策検討調査 (環境庁請負調査) 報告書, 179-197
- 13) 吉田正人 (1989) : 自然観察会の実施状況に関するアンケート調査 : 自然が友だち (第2回清里環境教育フォーラム報告書), 146-153
- 14) 大島順子 (1991) : 環境教育プログラムに関するアンケート調査 : 自然は家族 (第4回清里環境教育フォーラム報告書), 96-100
- 15) 降旗信一 (1991) : 環境教育プログラムの調査結果と分析 : 自然は家族 (第4回清里環境教育フォーラム報告書), 101-108
- 16) 小学館 (1996) : 自然の学校・プロが教える自然

- の遊び術 (BE-PAL OUTING MOOK), 6-16
- 17) 永吉宏英 (1993) : プログラミングの技術 : 環境教育のための人づくり・場づくり (環境庁委託業務報告書 / (財) 日本地域開発センター編), 56-63
- 18) 高田 研 (1993) : プログラムの導入からまとめまで : 自然解説指導者養成用テキスト ((財) 国立公園協会編), 82-88
- 19) (財) 余暇開発センター (1996) : レジャー白書 '96, 1-83